

4 満洲開拓の記憶を未来へ ：慰霊碑と記憶の継承を学生たちと考える（盛岡短期大学部授業「地域社会論演習」）

岩手県立大学盛岡短期大学部 教授 三須田善暢

該当する
原則

原則 9：持続可能性を推進する

1. 活動の背景

本活動は、岩手県立大学盛岡短期大学部「地域社会論演習」におけるサービスラーニング型実践として実施したものである。演習では、地域課題に関する企画を学生自身が構想・実践し、地域社会との関わりを通じて学ぶことを目的としている。今回は、三須田が顧問として関わる「岩手県満洲開拓殉難の塔を守る会」と連携し、旧満洲開拓移民に関する慰霊と歴史継承の問題を取り上げた。現在、関係者の高齢化や後継者不足により、慰霊碑の維持管理という「モノ」の継承と、体験や記憶という「コト」の継承がともに困難となっている。こうした状況を踏まえ、学生たちが地域史や平和学習の視点から継承問題を考え、若い世代として関われる実践的活動を試みた。

2. 活動の経過

本活動では、まず学生が岩手県の満洲開拓と慰霊碑継承問題について理解を深めるため、シンポジウムや公開講座への参加、関連文献の読解、関係者への聞き取り調査などを実施した。その後、KJ法※を実施し、慰霊塔継承の現状と課題、若い世代としてどのような関わりが可能かを検討した。議論の結果、「知ってもらう」「来てもらう」ことを重視した実践として、「星空観察会&満洲開拓小冊子説明会」を企画・開催した。また、並行して学生主体による小冊子の制作も行い、慰霊塔の歴史や満洲移民の概要、現在の課題などを整理して発信した。これらの活動を通じて、学生たちは地域史継承を自らの課題として考える契機を得た。

※KJ法：文化人類学者の川喜田二郎が考案した、データを集めて既存の分類枠組みを打破するための発想法である。

(1) 事前学習と問題意識の共有

本活動の出発点は、学生たちが岩手県における満洲開拓の歴史と、その慰霊継承問題について基礎的理解を得ることであった。そのため、まず3名の参加学生（短大

部2年生）には、2025年8月に開催された『「岩手県満洲開拓殉難の塔」を考えるミニシンポジウム」および盛岡短期大学部公開講座への参加を求めた。これらの場では、岩手県から旧満洲へ渡った開拓移民の実態、敗戦後の引揚げ体験、戦後の慰霊活動の経緯、現在の継承問題などについて学んだ。

あわせて、授業にてKJ法の基礎的手法を学び、黒澤勉『満洲開拓民の悲劇』や三須田による日本社会学会大会報告原稿などを用いて輪読を行った。学生たちは、満洲開拓が国家政策として推進された歴史である一方、多くの犠牲と苦難を伴ったこと、またその歴史が「被害」と「加害」の両面を持つため、現代社会において語り継ぐことが容易ではないことを学んだ。

さらに、実際に継承活動を担ってきた当事者から話を聞くため、「岩手県満洲開拓殉難の塔を守る会」前会長の高橋光氏および事務局の石頭悦氏への聞き取り調査を実施した（図1）。高橋氏からは、満洲での生活や敗戦後の引揚げの経験、戦後長年にわたり慰霊活動を続けてきた思いをうかがった。また石頭氏からは、継承活動へ参加するようになった経緯や、裂織りを通じた地域文化活動との関わりについて話を聞いた。これらの聞き取り



図1 高橋前会長への聞き取りの様子

には、岩手大学教育学部や岩手県立大学総合政策学部の教員も参加し、学生たちは多角的な視点から学ぶ機会を得た。

(2) KJ法による課題整理と企画構想

以上の学習と聞き取りを踏まえ、学生たちはKJ法を実施して、慰霊塔継承の現状と課題について整理を行った。検討テーマは、「慰霊塔維持管理の課題は何か」「なぜ関係者が減少しているのか」「そのうえで自分たちに何ができるのか」という3点である。

議論では、まず慰霊塔そのものの認知度の低さが指摘された。慰霊塔は立地的にわかりにくく、地域住民であっても存在を知らない人が少なくない。また、満洲開拓の歴史そのものが家族内でも語りづらい性格を持ち、若い

世代に十分継承されていないという問題も共有された。加えて、関係者の高齢化や後継者不足、子孫の県外転出などにより、従来の血縁・地縁を基盤とした継承モデルが限界に達しつつあることも確認された。

一方で、「自分たちに何ができるか」という議論では、まず「来てもらうこと」「知ってもらうこと」を重視する方向性が共有された。具体的には、イベント開催、マップや看板の整備、小冊子制作、QRコードによる情報発信、地域の飲食店や観光資源との連携など、多様なアイデアが提案された。また、満洲開拓という重いテーマだけを前面に出すのではなく、交流や地域文化活動と組み合わせることで、学生や地域住民が参加しやすい形にすることも重要だと考えられた。

(3) 星空観察会の企画と実施

こうした議論を踏まえ、学生たちは具体的なプチ企画として、「星空観察会&満洲開拓小冊子説明会」を実施することとした。会場は慰霊塔に隣接する「Mottainaiテラス」（石頭氏が経営）とし、2025年12月19日に開催した（図2）。

学生たちは、開催案内文や周知チラシの作成、学内メールによる広報、参加者募集などを主体的に担当した。企画では、星空観察を入口としながら、慰霊塔や満洲開拓の歴史について自然に関心を持ってもらうことを意図した。また、大学から会場までの送迎を行い、温かい飲み物や簡易版パンフレットも準備した。参加者には星空観察アプリの導入も呼びかけ、歴史学習と交流を組み合わせた柔らかな雰囲気づくりを目指した。

当日は曇天であったため、期待していたほど星空観察はできなかったものの、屋内での交流と説明を中心に活動を実施した。参加者には短大部学生だけでなく、他学部学生、教員、「守る会」関係者なども含まれていた。石頭氏による裂織りの説明も行われ、地域文化活動と歴史継承との結びつきについて学ぶ機会となった。

特に学生たちにとって印象的だったのは、単に歴史を「教わる」のではなく、地域の人々対話しながら考える経験であった。慰霊活動を「過去の問題」としてではなく、「現在の地域社会がどう歴史と向き合うか」という課題として捉える視点が生まれたことは、大きな成果であった。

(4) 周知用小冊子の制作

星空観察会と並行して、学生主体による小冊子制作も進めた。冊子では、慰霊塔建立の経緯、岩手県の満洲移民の概要、戦後の慰霊事業、高橋氏の証言、「守る会」の活動、現在の課題などを取り上げた。また、塔周辺の

地図や年表も掲載し、初めて知る人にも理解しやすい構成を目指した。

編集作業は学生たちがレイアウトやデザインも含めて主体的に作業した。内容については高橋氏にも確認を依頼し、当事者の視点を踏まえた修正を行った。星空観察会では試作版を配布し、その後修正版を300部印刷した。

完成した冊子（図3）は、今後県立博物館での展示や、「Mottainaiテラス」、喫茶「とちの実」（両方とも守る会会員が経営）などで配布予定である。学生たちは、単なる授業課題としてではなく、「地域に残る形」として成果物を制作した経験を通じて、地域連携活動の意義を実感することができた。

以上の一連の活動を通じて、学生たちは歴史継承の困難さと重要性を学ぶとともに、地域住民や関係者と協働しながら課題解決を模索する実践の経験を得ることができた。また、慰霊活動を地域史学習や平和学習、多世代交流へ接続する可能性についても一定の手応えを得た。



図3 周知用小冊子

3. 今後の活動

今後は、今回の活動成果を踏まえ、継続的かつ多様な形で地域連携活動を発展させていく予定である。まず、小冊子については内容の改善と増刷を進め、県立博物館での展示や地域施設での配布を通じて、満洲開拓の歴史や慰霊塔の存在を広く周知していきたい。また、QRコードやウェブ媒体の活用を進め、若い世代がアクセスしやすい情報発信の方法も検討する。

加えて、慰霊塔周辺を活用した小規模イベントや学習会を継続的に実施し、「来てもらう」「知ってもらう」という活動を発展させたい。今回の星空観察会では、歴史だけを前面に出すのではなく、地域文化や交流活動と組み合わせることで、学生や地域住民が参加しやすい企画となった。この経験を踏まえ、裂織り展示や地域カフェとの連携、フィールドワークなど、多様な切り口から継承活動への参加を促していく。

さらに、資料の整理・デジタルアーカイブ化も進め、将来的には大学・地域団体・博物館等が連携した保存体制の構築を目指す。慰霊碑の継承は、単なる施設維持ではなく、地域社会が過去の歴史とどのように向き合うかという課題でもある。今後は、学生参加型の地域史学習や平和教育の実践を継続しながら、多様な世代と主体が関わる持続的な継承モデルを模索していきたい。



図2 星空観察会ポスター